

巻頭言

日本油化学会とともに歩んで

公益社団法人日本油化学会名誉会員 阿部正彦



思い起こせば、私が日本油化学会に入会したのは確か今から48年ほど前である。当時大学院1年生だったと思うが、東北大学において開催された本年会で発表させて頂いた時からである。私は本学・工学部・工業化学科(当時の一時期だけ、結果的に私が入学した年だけ、野田校舎と神楽坂校舎の2カ所に存在)の荻野圭三教授の門下生となり、初めての学会発表であったこともあり非常に緊張していた。荻野先生は本学会関係の仕事だったと思うが、海外視察の訪問団長として出張しなければならなかったために東北大での学会に参加できなかった。心細く思われたのだろうか、理学部の目黒謙次郎先生に私の発表のサポートをお願いしてくれていた。お蔭で私自身は大きな看板を背負った様な気になり、とても心強く発表に臨む事ができたことを今でも鮮明に覚えている。50年近く会員として継続してきたお蔭でこのたびの名誉会員の推戴を受けたのを機に、巻頭言の執筆を依頼された。巻頭言には相応しくないかと思うが、あえて日本油化学会に関わる備忘録な話を進めさせて頂きたい。

私が学生や助手時代には日本油化学会には著名な先生方が沢山おられ、とても華やかだった。今でも鮮明に覚えているのは毎年秋に開催されていたセミナーに参加させて頂き、先生方といろいろなお話しをできることがとても楽しみだった。例えば、埼玉大・名誉教授の福田清成先生は、講談師のような独特な語り口でついつい話しに引き込まれ、聴衆を決して飽きさせない配慮をされた話しの進め方をされ、また休憩時には受講者を連れて清里のほのほのとした散歩道を散策をしながら小鳥のさえずりに耳を傾けたり、野花を愛でたり、楽しい講話をいくつも拝聴することができた。また、化学サブノートは当時の高校生の間で有名であり、その著者である東理大・名誉教授の目黒謙次郎先生の熱力学の話はとても楽しく、かつ優しく解説してくれた。その後も何回か拝聴する機会に恵まれたが、同じ話題でも起承転結を変え、聴衆を常に考えさせながらの話題を組み上げられていたのは自分が教員になってから、その緻密さに驚いた次第である。拝聴した直後、こんな簡単だったのかと思い油断をしてしまったため、直ぐにまた熱力学の樹海をさまよう羽目になってしまったのが残念である。さらに、都

立大・名誉教授の佐々木恒孝先生のシャボン玉の話はととても面白く拝聴させて頂いた記憶がある。非水溶液のコロイド化学の第一人者である東理大・名誉教授の北原文雄先生の講義は、いつも誠実さがにじみ出る雰囲気醸し出しており、バンカラ風の気質が多い当時の大学の先生のイメージとかけ離れていて、いつもきちんと襟を正した一流企業の重役を思わせる雰囲気であった。白寿になられようとする昨年(2017年)にはこれまで時々話しをされていたコロイド関係の話を纏めた「コロイド化学史」と言う貴重な単行本を出版され、決して衰えることを知らない先生にはただただ驚かされる次第である。北原先生には私の大学院時代から目にかけて下さり(と言うより、北原研(神楽坂校舎)に仮住まいさせていただいていたにも関わらず、肝心の先生の授業を2回もサボったことから先生の記憶に残ったのかも知れない)。私がない時に限って名前が呼ばれたことを友人から聞いた覚えがある)。しかし、私が理工学部の教員になってからも何かにつけて思い出してくれて、いろいろとご教授頂いたにも関わらず、不出来な門下生であったことを反省している。さらに、東理大・名誉教授の近藤保先生には、私が助手になったばかりの時、まだ本学が保有する数少なかったNMRの装置をお借りした時にサンプル管を提供して下さったり、近藤先生のご退官されてからつい3、4年前まで月に2回ほど私の研究室に顔を出して下さり、当研究室のリポソームの研究のサポートや英語論文の添削指導などをして頂き図々しくもごく最近まで面倒を見て頂いた。恩師の荻野圭三先生(名誉教授)には、界面活性剤の溶液物性の研究をスタートさせることになった極めて重要な機会を頂いた。この他にもこの学会を通していろいろな先生方にお世話になった。例えば、名工大・名誉教授の岡林博文先生には、物性研究しかやってこなかった私が箱根で目黒先生の音頭による国際会議の事前打ち合わせだったと思うが、宿泊して同室になった折、私が界面活性剤の合成をしようかと話したら、無駄時間は使わない方が良いのでサンプルは私が合成するからほしいものを言いなさいと言って下さり、確かSDSを合成して頂いた記憶がある。その後、界面活性剤の混合ミセルを研究していた私は、炭化水素

系界面活性剤とフッ化炭素系界面活性剤を同時に溶解させても混合ミセルは作りにくいとされていた。では同一分子内に異種疎水基が共存する界面活性剤が形成するミセルは炭化水素系界面活性剤とフッ化炭素系界面活性剤とに分離しないのではと考え、東理大・工学部の好野則夫教授に相談した。いろいろと苦心された結果、フッ素系ハイブリッド界面活性剤を合成して頂いた。お蔭で、それらの界面活性剤を用いたユニーク研究ができたと自負している。またフッ素系界面活性剤は弘前大・理工学部の沢田英夫教授も合成して下さり、多くの界面活性剤や表面改質剤を頂戴した。それらの物質を用いた界面化学的研究を通して、京都工芸繊維大・名誉教授の川瀬徳三教授からは物性屋としての立場からいろいろご教授を頂いた仲の良い悪友でもある。当時は味の素の研究者であり、アメリカに駐在していた坂本一民先生と親密になったのは、アメリカ・クラークソン大で開催された国際会議の時だったと思うが、現在も本学の客員教授として酒井研の学生の面倒を見てくれている。さらに、北里大の伊藤俊洋先生は人間的にも魅力的な方であり、ご専門以外の学問にも造詣が深く、幾つもの本を紹介して頂き、お蔭で人間的に少しは成長できたような気にさせて頂いたのは今からほんの10数年前のことである。

学会開催中の忘れられない出来事として記憶しているのは、ある学会開催中に筑波大・名誉教授の蓮 精先生と京都大・名誉教授の伊勢典夫先生とが、コロイド分散粒子の安定性に関して、「引力」支配か「斥力」支配かの学術的な解釈のやり取りは、学問の面白さや厳しさを賢明に追求されている学者同士の学術的係争を目の当りにして、その場に立ち会えた喜びを研究者の1人としてとても感銘を受けた。

神奈川大・特別招聘教授の田嶋和夫先生と東理大・理学部の亡き上野 實先生にコロイド・界面化学の基礎を優しく手ほどき頂いた記憶があり、横浜国大の亡き国枝博信先生とはエマルションに関していろいろ議論させて頂き、先生とは年齢が1歳しか違わなかったため公私ともに仲良くして頂いたが、亡くなるのが早すぎた。懐かしく思い出すのは、留学時期も同じ時期にフロリダでの学会でお会いしたことである。2人とも過ぎ去りしモチモチの時期であったと自負している。もう一人亡くなるのが早すぎた仲間がいる。それは数年年下の東理大・理学部の江角邦男先生であり、天才的な科学者だったと思っている。学会を通してお世話になった方は現長崎国際大の柴田 攻先生であり、本学会の国際会議を佐世保で開催した折、実に見事に実行委員長を務めて頂き頼りになる仲間であり、凶々しくも今もなお世話になっている次第である。東理大・名誉教授の小石眞純先生には、微粒子製造・表面改質に関して長年ご指導頂いた。また、福岡大・名誉教授の杉原剛介先生に関して未だに強烈に覚えているのは自叙伝(作家名:安芸遼介)でもある小

説「菊は咲くか:三島由紀夫とそして自衛隊の若き士官たち」を頂いた。先生は九大を卒業する前に防衛大を卒業されており、亡き三島由紀夫と自衛隊で寝食を共にしたことを書いており、三島由紀夫の知られざる面を教えて頂いたのと先生自身のユニークな経歴には驚かされた。その他にも、九大・名誉教授の師井義清先生や福岡大の錦戸永宗先生など、熱力学の解釈ではお世話になった。

私は、定年を過ぎた現在も東京理科大学の野田キャンパス内にある研究推進機構・総合研究院に所属しているが、古巣の現理工学部・先端化学科の酒井秀樹先生や酒井健一先生とは別棟ではあるものの渡り廊下で繋がっており、身近にいたので迷惑をかけてはいないかと懸念している今日この頃である。私自身は今年71歳になり、本学の会員になってから40年以上が経った今、“たかが界面活性剤、されど界面活性剤”と改めて認識し始め、ごく最近、助教のAvinash Bahadaniが幾つかの持続可能なかつ再生可能な界面活性剤の合成に成功し、かつ、有機合成に優れている彼と界面活性剤に関わらず、あれも作ってみよう、これも作ってみよう議論している毎日であり、私自身、助教授時代に戻ったようにワクワクしていて研究生生活を実に楽しんでいるところである。彼のアドバイスもあり、2年毎に開催される国際学会 Surfactant in Solution 2018(アメリカ・オクラホマ大学)でグリーン化学の立場に立った界面活性剤の合成と物性に関する Sustainable Surfactant Derived from Renewable Feedstock と題した基調講演を行うことができたのも、本会の名誉会員推戴が運んでくれた喜びであるかも知れないと思っている。この備忘録がずいぶん長くなってしまったが、この稿を閉じる前に日本油化学会・会員の皆様方に提言させて頂きたい。

私が入会した頃の会員数は確か2,500名以上在籍していたと思うが、現在では半分以下の1,000名余りとなり、このまま推移していけば1/3になるまでにはさほど時間がかからない。会員数の激減状況は何も日本油化学会の問題だけではなく他の学協会が抱える共通の大問題である。原因として考えられるのは、インターネットの普及により情報が容易に入手可能となり、あえて会員になる必然性がなくなってきたせいでもあると思われる。確かに、情報の入手の手段としてインターネットは便利であるが、得られた情報をどう生かすかは本人の能力によるところは勿論ではあるが、その人を取り巻く人的関係によるところが大きい筈である。その人間関係を構築できるところが専門性に特化した学会という集団であり、そこに所属して会員同士がトコトン議論をすれば想定外の価値が付与される筈である。若い人達には、自己啓発の目的のために学会という集団に所属し、会(日本油化学会)の継続および発展をさせて頂きたい。

(東京理科大学・研究推進機構・総合研究院)